

「無責任」が創発するとき

昔、フランスの貧しい村で起こった  
不思議な出来事についての物語です。

その村の教会に長く務めた牧師が、  
遠くの村に転任することになりました。

その牧師への長年のお礼として、  
貧しい村人全員が、貴重なワインを一杯ずつ持ち寄り、  
樽に詰めて、牧師へプレゼントすることになりました。

そこで、出発の前日、集会所に次々と村人がやってきて、  
置いてある樽に、一杯のワインを注いで帰って行きました。  
そして、満杯になった樽を、村長が牧師に贈呈したのです。

ところが、赴任地に到着した牧師が、  
その樽を開けて、ワインを飲もうとしたところ、  
不思議なことが起こっていました。

そのワイン樽の中身が、水になっていたのです。

そこで、連絡を受けた村長が  
原因を調べたところ、  
寂しい事実が明らかになりました。

貧しい村人の全員が、  
貴重な一杯のワインの代わりに、  
そっと一杯の水を樽に注いでいたのです。

そして、全員、  
「自分一人だけなら、  
正直にワインを注がなくとも大丈夫だろう」  
と考えていたのです。

この物語は、片田舎の村での小さな出来事ですが、  
現代の社会において、  
我々が日常的に目撃する出来事でもあります。

「全員責任」を標榜する人間集団から、なぜか、  
「集団的無責任」が創発してくる。

我々は、しばしば、  
そうした出来事を、目にするのです。